

# 藤原京左京三条三坊の調査 —第204-6次

## 1 はじめに

本調査は橿原市下八釣町における個人住宅建設にともなうものである。調査地は藤原京左京三条三坊東南坪と西南坪に位置し、東三坊坊間路の推定地にあたる（図143）。

周辺では、約150m南の藤原宮第63-7次調査で、東三坊坊間路の両側溝のほか、藤原京期の建物、弥生時代の円形周溝墓などが確認されている（『藤原概報21』）。

調査区は、東三坊坊間路の両側溝の想定位置を考慮し、東西14m、南北3mの大きさで設定した。また、調査の途中で調査区北辺の一部を東西1.5m、南北1.3mの範囲で拡張した。調査面積は44.0m<sup>2</sup>である。調査は2020年10月7日に開始し、10月26日に終了した。

## 2 検出遺構

調査区の基本層序は①耕作土・いわゆる床土（厚さ15~20cm）、②灰色土層（厚さ10~20cm）、③褐色土層（厚さ10~20cm）、④含炭灰色砂（藤原京期の土器・炭化物廃棄層SX11585：厚さ5~15cm）、⑤黄褐色土（藤原京期以前の遺物包含層：厚さ10~30cm）、⑥暗褐色細砂～粗砂（沼状遺構SX11575埋没後の弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけての堆積層：厚さ30~40cm）、⑦暗灰黄色砂・砂質土（地山）の順である。このうち④層は、調査区西半でのみ確認できる。またY=-17,021以西では⑤層は確認できず、かわりにSX11575埋没後の堆積層である⑥層が確認できる。ただし、⑤層と⑥層の先後関係は両者の間に南北溝SD11590があるため不明である。遺構検出は、④層の広がりを確認したのち、⑤・⑥層上面でおこなった。検出面の高さは標高69.10~69.30mである。

本調査区での主な検出遺構は、土器・炭化物廃棄層、南北溝2条、土坑1基、井戸1基、溝状遺構1条、沼状遺構である（図144）。

### 古代の遺構

**土器・炭化物廃棄層SX11585** 調査区西辺から東に約5mの範囲で広がる土器・炭化物廃棄層（④層）。南北溝SD11590を覆う。大型の土器片、炭化物、燃えさしなど

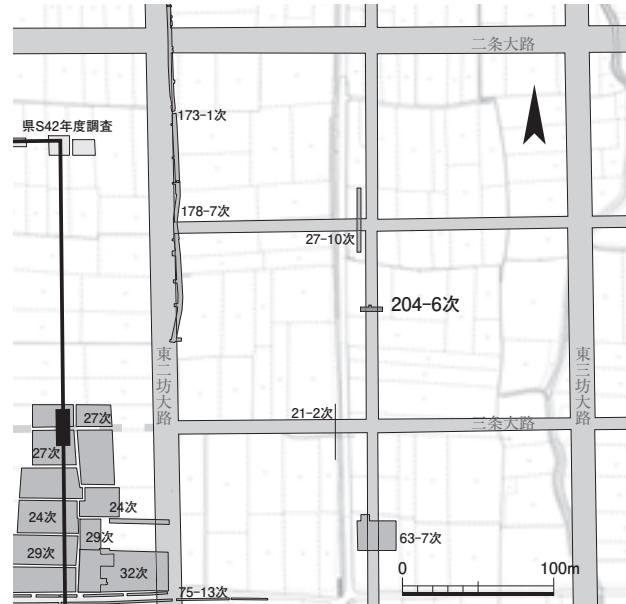


図143 第204-6次調査区位置図 1:5000

を含む。厚さは最大15cmで、南西から北東に向かって薄くなる。藤原京期の土器が大量に出土した。

**南北溝SD11580** 調査区東寄りで検出した南北溝。幅1.0m、深さ0.3m。埋土は2層に分かれ、下層は砂層で流水の痕跡が確認できる。第63-7次調査で検出した東三坊坊間路東側溝SD6954の北延長上にあり、東三坊坊間路東側溝とみられる（図145）。

**南北溝SD11590** 調査区西寄りで検出した南北溝。幅1.7~2.0m、深さ0.3m。埋土は砂と粘質土の互層で、流水と堆積を繰り返した様相が確認できる。第63-7次調査で検出した東三坊坊間路西側溝SD6951~6953の北延長上にあり、東三坊坊間路西側溝とみられる（図145）。

### 古墳時代以前の遺構

**土坑SP11576** 調査区中央南寄りで検出した土坑。中央を現代の土管埋設溝が東西に横切る（図146）。直径1.3m、深さ0.7m。断面の状況から柱穴の可能性があったため、関連する柱穴の有無を確認すべく調査区北辺に拡張区を設け、遺構検出をおこなったが、これと組む柱穴は確認できなかった。抜取穴・掘方から古墳時代前期前葉の広口壺をはじめとする土器が出土した。

**井戸SE11577** 調査区東寄りで検出した素掘りの井戸。直径1.8m、深さ0.8m。北辺は調査区外となる。重複関係からSD11580より古い。埋土から弥生時代後期の土器が出土した。

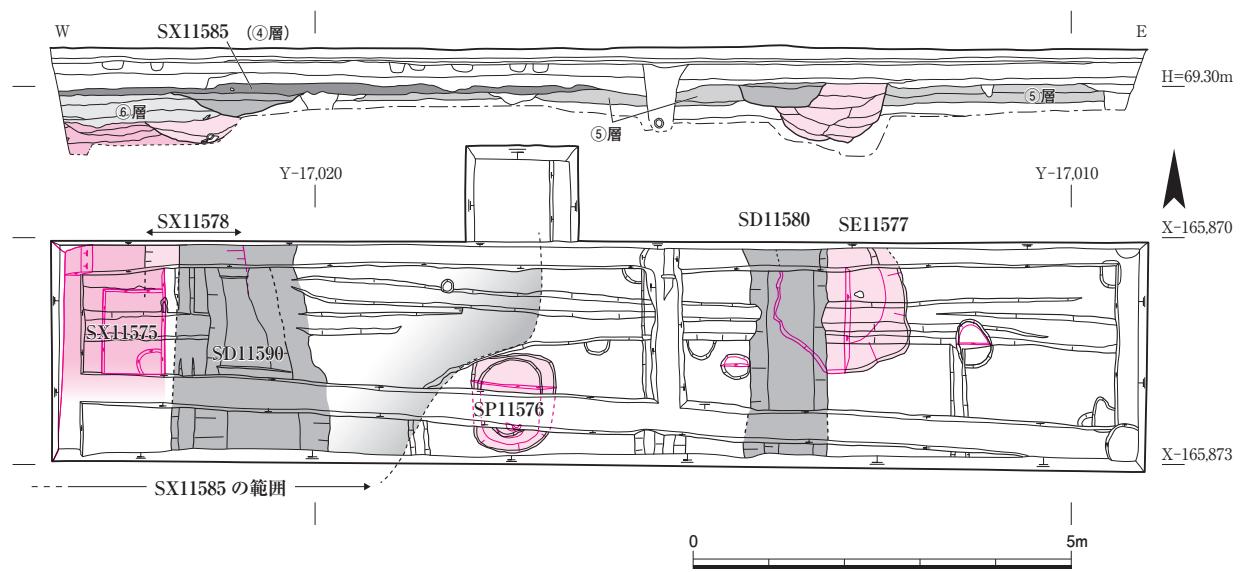


図144 第204-6次調査区遺構図・北壁土層図 1:100

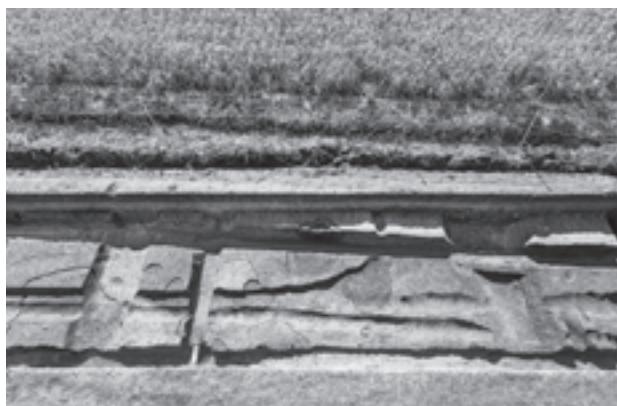


図145 東三坊坊間路SD11580・SD11590検出状況（北から）



図147 SX11575断面図（南東から）

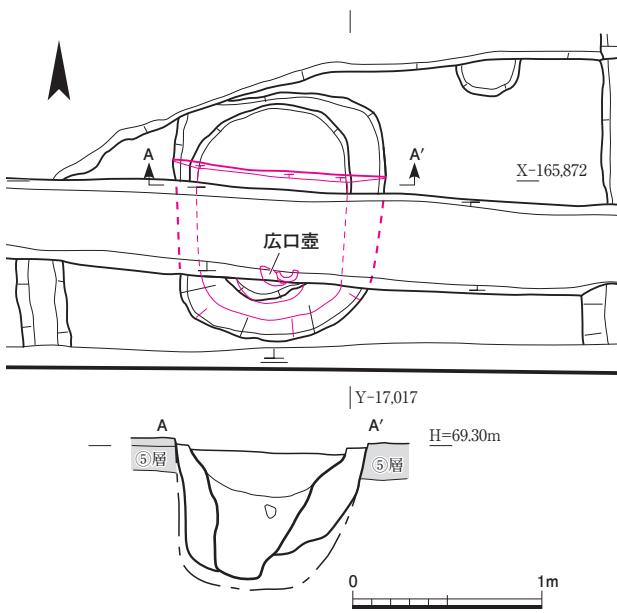


図146 SP11576遺構図・断面図 1:40

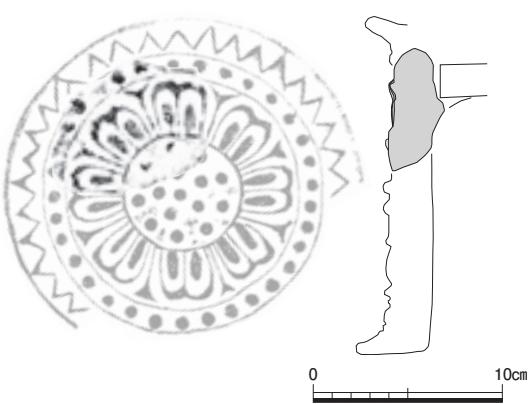


図148 第204-6次調査出土軒丸瓦6276G 1:4

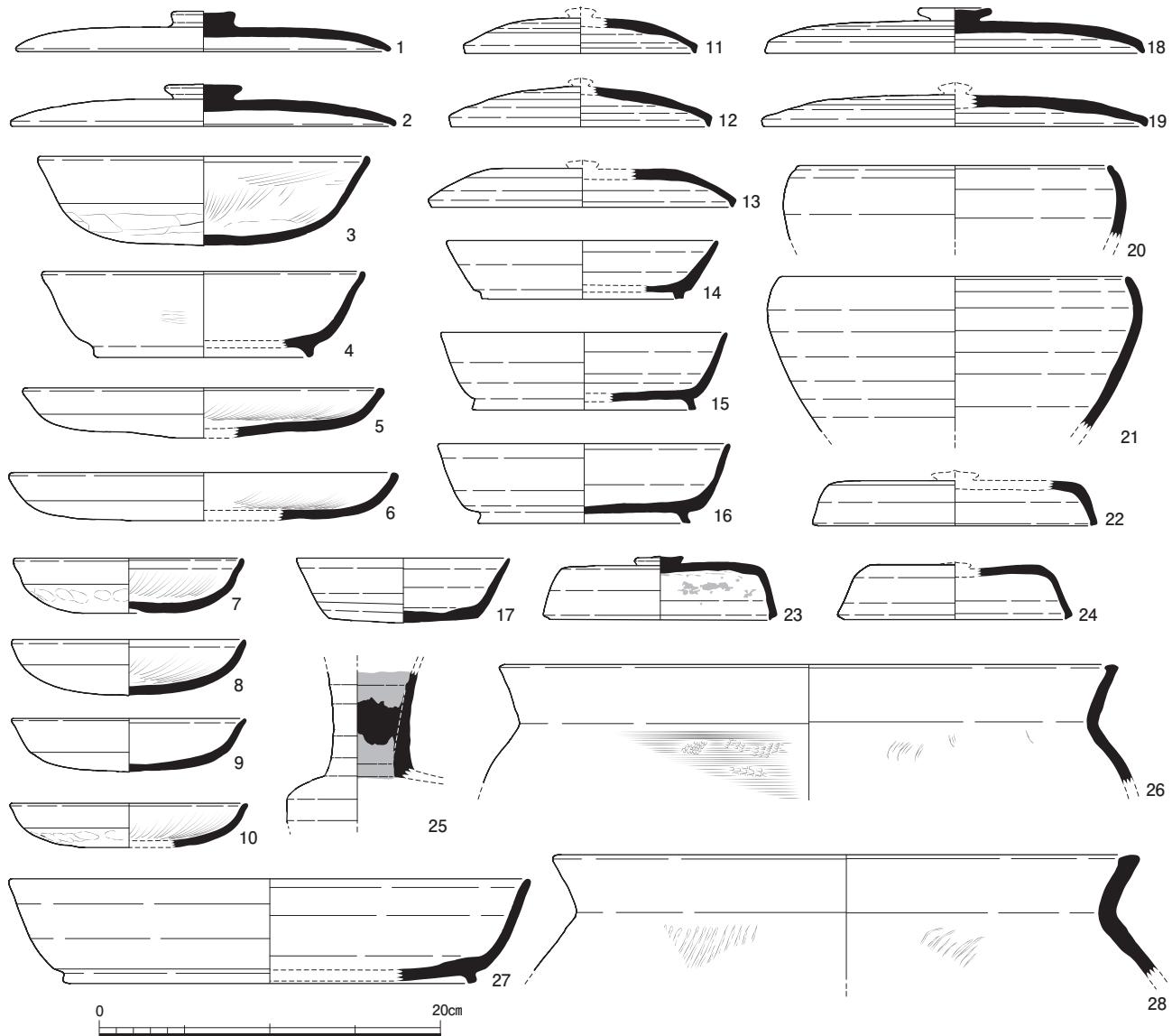


図149 第204-6次調査出土土器 (1) 1 : 4 (1~26 : SX11585、27・28 : ②層)

**溝状遺構SX11578** 調査区西の北壁土層および北排水溝で⑥層を掘り下げて一部検出した。SX11575を掘り込み、溝状の遺構になるとみられる。幅1.2m、深さ0.2m。最下層で残存状態の良好な弥生土器が出土した。

**沼状遺構SX11575** 調査区西端で検出した沼状遺構である。⑥層を掘り下げて検出した。東西2.0m以上、南北3.0m以上。検出面から深さ0.4mまで掘り下げたが、さらに下層に湿地堆積が続く(図147)。SX11575からは弥生時代後期後葉から終末期までの弥生土器・土師器、雜木などがまとまって出土した。

(石田由紀子・片山健太郎／総社市)

### 3 出土遺物

**瓦類** 軒丸瓦1点(6276G)、丸瓦10点(1.0kg)、平瓦30点(2.7kg)、榛原石1点(0.8kg)が出土した。6276Gは外縁鋸歯文が欠損し、珠文から蓮弁、中房にかけて4分の1程度残存する(図148)。SX11585出土。6276Gは藤原宮所用だが、藤原宮・京での出土例はこれまで5点と非常に少ない。丸瓦・平瓦については、焼成・胎土からいざれも藤原宮所用と考えられる。(石田)

**土器** 整理用木箱で21箱が出土した。縄文土器小片、弥生土器、土師器、須恵器などがあり、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半、藤原京期のものを多く

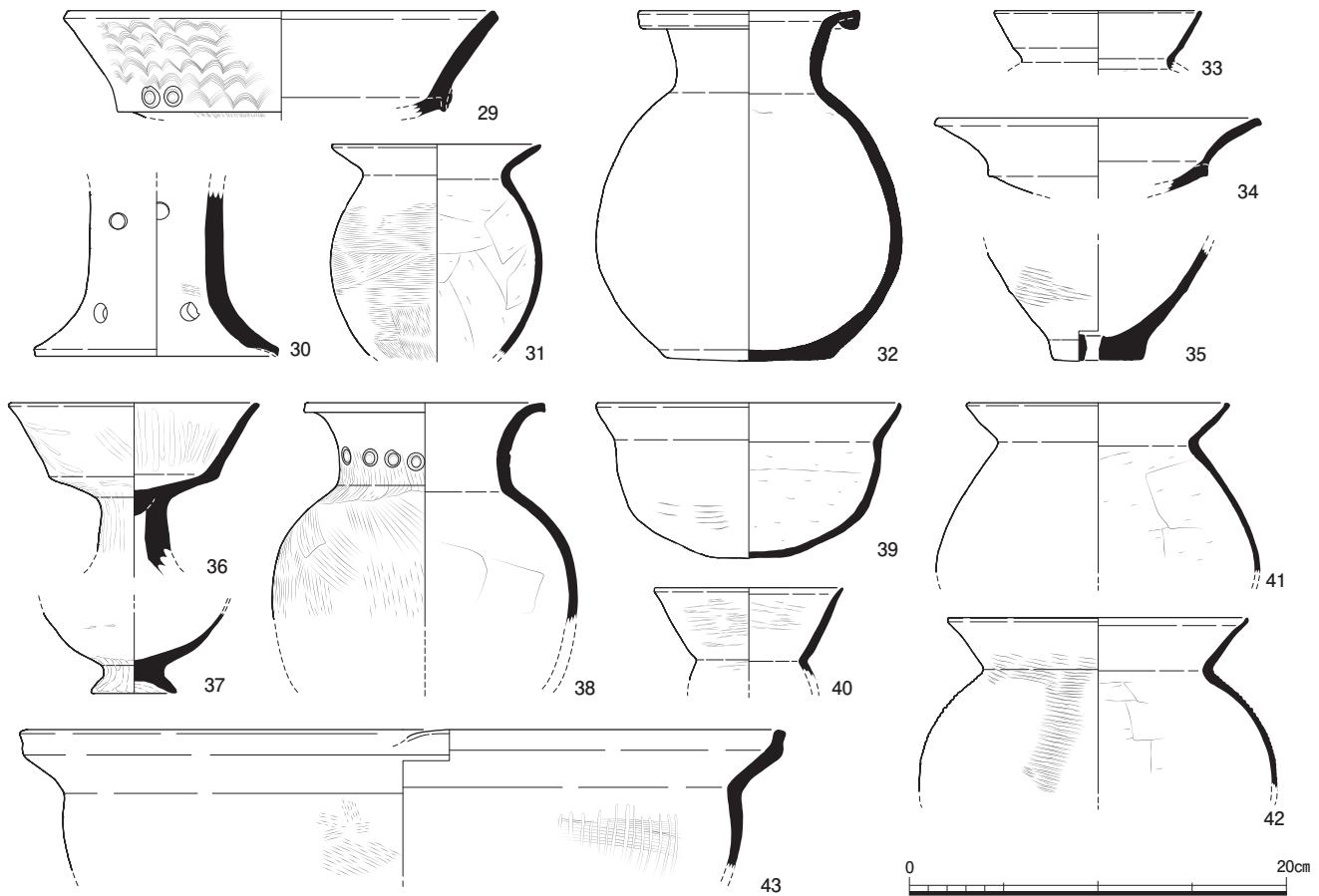


図150 第204-6次調査出土土器(2) 1:4  
(29~31: SD11590、32・33: SP11576、34・35: SE11577、36・37: SX11575、38: SX11578、39~43: ⑥層)

含む。SX11585や②層からは藤原京期の土器が(図149)、SD11590やSP11576、SE11577、SX11575、SD11578からは弥生時代から古墳時代の土器が主に出土している(図150)。  
**SX11585ほか出土土器** 土師器には杯A、B、C、杯蓋のほか、脚部を面取りする高杯Aなどが、須恵器には無台杯、杯B、杯蓋、皿B、皿蓋、鉢A、壺A蓋、平瓶、甕Cなどがある。

1~26はSX11585から出土した土器である。土師器蓋(1・2)はいずれも口径22cm前後を測る。内外面の磨滅が著しい。土師器杯A(3)は復元口径19.5cmで、内面に二段放射暗文を施す。図化しなかった資料の中には、復元口径15cm前後を測るものも存在する。土師器杯B(4)は復元口径18.9cm。内外面とも磨滅が著しいが、外面上にはミガキの痕跡がわずかに残される。土師器杯C(7~10)は復元口径13.5~14.0cmにおさまり、底部外面は不調整、内面には一段放射暗文を施す。径高指数は7・8が23.8、9が22.8である。土師器皿A(5・6)は復元口

径21~23cmで、内面には一段放射暗文を施す。

須恵器杯蓋は復元口径13~15cm程度の一群(11・12)と、18cm前後の一群(13)からなり、いずれも外面にはロクロ時計回りのヘラケズリが施される。これらは図化しなかった資料も含め、かえりをもたないもので占められる。無台杯(17)は復元口径12.5cmで、外面下半にはロクロ時計回りのヘラケズリが施される。須恵器杯B(14~16)は復元口径17cm前後を測るが、15cm前後を測るものもわずかに含まれる。須恵器皿蓋(18・19)は復元口径22cm程度を測る。かえりをもたないもので占められ、外面にはロクロ時計回りのヘラケズリが施される。

須恵器鉢A(20・21)はロクロナデにより仕上げられる。須恵器壺A蓋(22~24)は復元口径12~16cmを測り、23の内面には漆が薄く付着する。平瓶(25)は体部から頸部にかけての破片。頸部を中心として内面および破面に漆が付着し、頸部中位には凝固した漆の塊が認められる。須恵器甕C(26)は、外面に格子タタキのちカキ

メを施す。内面には同心円の当具痕が残される。

27・28はSX11585の上層である②層からの出土。須恵器皿B (27) は復元口径24.2cmを測る。須恵器甕C (28) は外面に平行タタキ痕、内面には同心円の当具痕を残す。

これらは、土師器杯Cや須恵器蓋の形態、脚部を面取りする高杯Aの存在などから飛鳥Vに位置づけられる。

**SD11590出土土器** 古代の土師器や須恵器の小片に加えて、弥生時代から古墳時代にかけての土器も出土している。二重口縁壺 (29) は二次口縁外面に円形の浮文を付したのち、波状文を施す。一次口縁外面には縦方向のミガキをおこなう。庄内式末～布留0式に位置づけられる。器台 (30) の脚部には、3方向の透孔が上下2段にわたって穿たれる。弥生時代後期後半。甕 (31) は外面をハケ目、内面をケズリで調整する。口縁端部は丸く収められる。布留0～1式に比定される。

**SP11576出土土器** 掘方、抜取穴から古墳時代前期前葉の土師器が出土している。広口壺 (32) は抜取穴からの出土で、平底の底部と下ぶくれの体部、口縁端部における粘土の折り返しを特徴とする。外来系土器の可能性が考えられる。甕 (33) も抜取穴埋土出土。内面にケズリ調整をおこない、口縁端部はわずかに肥厚する。そのほか、図化しえなかった資料の中にも布留形甕の口縁部片が含まれる。これらはいずれも布留0～2式に位置づけられる。また、掘方からは布留1～2式に比定される甕や直口壺の細片が出土している。

**SE11577出土土器** 弥生時代後期後半から末の土器が多数を占める。高杯 (34) は口縁部がわずかに外反する。鉢 (35) はタタキ成形の有孔鉢。

**SX11575・SX11578・⑥層出土土器** SX11575・SX11578からは弥生時代後期後半から終末期、SX11575・SX11578埋没後の堆積層である⑥層からは弥生時代終末期から古墳時代前期前葉の土器が出土した。高杯 (36) はSX11575からの出土。円盤充填技法により製作され、内外面に太いミガキをおこなったのち、底部内面には赤彩を施す。台付鉢(37)もSX11575からの出土。広口壺(38)はSX11575およびSX11578から出土したもので、頸部の4ヵ所に竹管文を施す。これらの土器はいずれも弥生時代後期後半から末に位置づけられる。

小型丸底鉢 (39) は⑥層から出土し、内面をケズリ調整する。40～42も⑥層からの出土。小型丸底壺 (40) は

口縁部内外面に横方向のミガキを施す。甕 (41・42) はいずれも内面ケズリ調整。42は外面に左上がりのタタキをおこない、口縁端部を上方につまみあげる。上記の土器は庄内式末～布留1式に位置づけられる。

43も⑥層出土の吉備系の鉢。片口をもち、外面はハケ目、内面はハケ目のちミガキで調整される。色調は茶褐色で、胎土には角閃石を多く含む。庄内式期。

(木村 理)

**木製品** SX11585から燃えさし2点が出土したほか、SX11575から角棒、炭化材、雑木類が出土した。(片山)

## まとめ

**古代** 本調査区では、東三坊坊間路の両側溝をほぼ想定位置で検出した。東側溝であるSD11580と西側溝であるSD11590の重心間の距離は7.1～7.4m、東三坊坊間路の路面幅は5.5～6.0mと側溝重心間距離や路面幅に關しても第63-7次調査成果とほぼ一致する(『藤原概報21』)。ただし、狭小な調査区のため、藤原京期の坪内の土地利用に関する手がかりは得られなかった。藤原京左京四条三坊東北・東南坪にあたる第63-7次調査では、一坪を田の字形に四等分する土地利用から、東西二坪にまたがる宅地利用への変化があきらかになっている(『藤原概報21』)。しかし、本調査区ではこのような東三坊坊間路をまたぐ遺構は確認できなかった。

また、SD11590埋没後、SD11590を覆うように広がる土器・炭化物廃棄層SX11585を確認した。土器・炭化物は南西から北東に向かって廃棄されたとみられ、出土量からも周辺に藤原京期の遺構の存在が想定できる。

**古墳時代以前** 弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土坑や井戸を検出した。これらは当該期の集落の存在を示唆するものであり、第63-7次調査の成果と合わせて、調査区周辺では弥生時代終末期から古墳時代にかけて活発な土地利用があったことがうかがえる。

また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての沼状遺構SX11575を確認したことは、古墳時代以前の調査地周辺の地形を考える上で重要な知見である。今後、周辺におけるさらなる調査の蓄積が俟たれる。(石田・片山)

## 謝辞

弥生・古墳時代の土器については山本 亮氏(東京国立博物館)のご教示を得た。記して感謝します。